これからの学校教育活動における指導のPDCAサイクルのあり方とは

はじめに

求められる「資質・能力を育む指導のPDCAサイクル」の確立

本誌は、生徒に育む資質・能力を学校教育目標として明確化し、その達成のための教育課程・指導計画の策定、それらに基づいた授業・指導実践、そしてその検証・評価から授業・指導改善を図る一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される営みを「学校教育デザイン」（**図1**）と名づけ、2017年6月号から12月号まで、それを描くための視点や考え方を特集記事で取り上げてきた。「学校教育デザイン」を描くことは、社会環境の変化や家庭・地域からの期待、そして自校が積み重ねてきた伝統を踏まえて、目の前の生徒の姿を見ながら、学校のあり方を更新していくものだ。そのため、学校教育目標への到達は一足飛びのものではなく、日々の授業やHR活動、部活動や学校行事が有機的に結びつき、さらに生徒の学習・生活状況調査や定期考査、模擬試験などの様々なアセスメントで成果や課題を精査し、教育活動を見直しながら、実現していくものである。すなわち、指導のPDCAサイクルを多次元的に回すことが求められる。

次ページからは、高校生の基礎学力の定着に向けたPDCAサイクルの構築を促進するため、19年度から各校で本格的な利活用が始まる「高校生のための学びの基礎診断」の検討ワーキング・グループの主査である荒瀬克己・大谷大学教授に、資質・能力を育む指導のPDCAサイクルのあり方について聞く。

図1　資質・能力の育成に向けた「学校教育デザイン」を描く営み

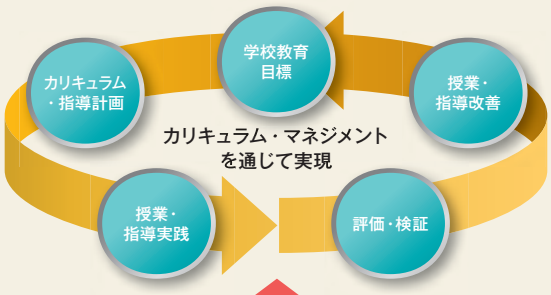
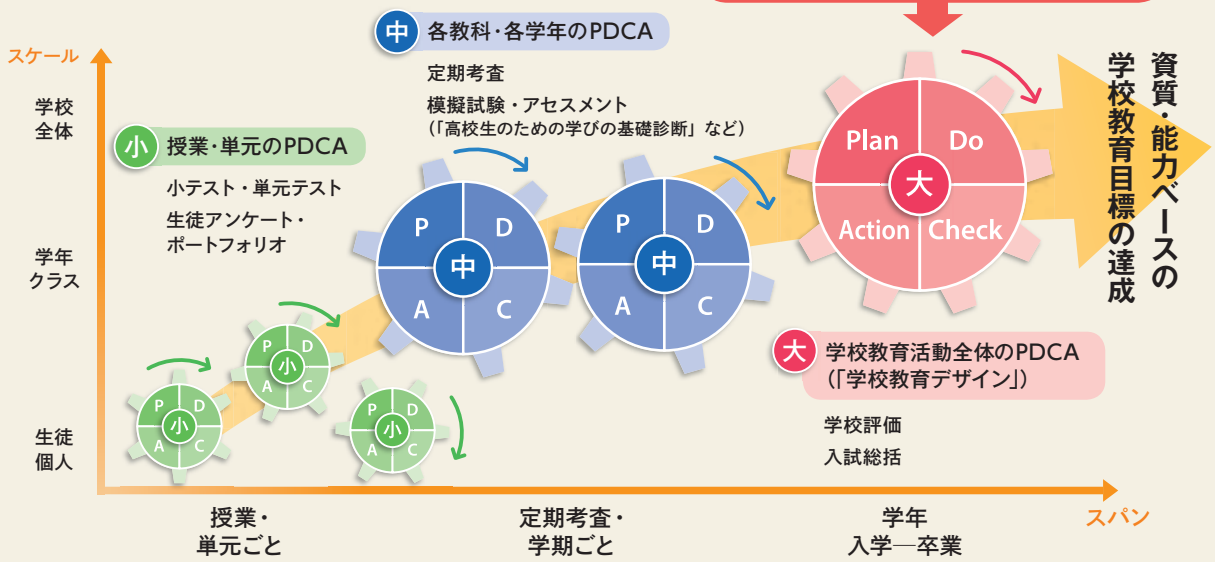


図2　学校教育目標達成のPDCAサイクル



インタビュー

教師同士の語り合いを通じた振り返りとアセスメントで、生徒の背中を押す

荒瀬克己・大谷大学教授に聞く

あらせ・かつみ　京都府・京都市立堀川高校校長、京都市教育委員会教育企画監を経て、2014年度から現職。中央教育審議会の各種委員、文部科学省「高大接続システム改革会議」の「多面的な評価検討ワーキング・グループ」主査、「高校生のための学びの基礎診断」の検討ワーキング・グループの主査等を歴任。

自校の弱みも自由に語り合える風土が必要

内山　次期学習指導要領では、学習内容に加えて、それを学ぶことで「何ができるようになるか」という視点で、育成を目指す資質・能力を、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱で示しています。資質・能力を育成するために、今後、各校では、学校教育目標から教育課程・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証までの一連のサイクルを、カリキュラム・マネジメントを通じて、各教師が実現していくことが求められます。まず、カリキュラム・マネジメントを推進する上で大切なことを教えてください。

荒瀬　カリキュラム・マネジメントを推進する上で、学校教育目標の設定がその出発点となります。どの学校も綱領や校訓を掲げていますが、より具体的に育てたい生徒像を描き、それを校内で共有することが重要です。この時、学校教育目標を掲げるだけでは、その達成のために具体的にどのようなことから取り組めばよいのか、すなわち、課題は見えてきません。大切なことは、自校の現状を正しく認識し、それを学校教育目標から引き算することです。そうして初めて取り組むべき課題が見えてきます。ただし、現状は強みだけでなく、弱みも含めて認識することが重要です。そのため、自校の弱みも自由に語り合える風土が校内には必要になります。

【聞き手】ベネッセコーポレーション 進研模試編集長 内山公宏 うちやま・きみひろ

内山　自校の強み、弱みを整理する際にも、育成を目指す資質・能力を意識して、生徒の様子を語り合うことが必要になってきますね。

荒瀬　授業、学校行事、HR活動など、様々な活動における生徒と学校組織の強みや弱みを語り、取り組むべき課題を教育活動ごとに洗い出していけるとよいですね。ただ、各教育活動における生徒の強みや弱みは、管理職よりも現場の教師の方がよく見えているものです。だからこそ、教科や分掌、教職歴にとらわれず、気づいたこと、感じたこと、そして疑問に思ったことを率直に言語化して共有できる風土が必要です。

以前、ある高校で「授業改善だより」を拝見した時、「本校の生徒に身につけてほしい主体性とはどのようなものでしょうか」と同僚間で問

い合うフレーズを見て、素晴らしいと思いました。高校生には主体性が必要だと誰もが言うけれど、では自校の生徒がどのような状態になったら主体性を獲得したと言えるのか、先生方は現状に即して問い直そうとしておられたわけです。目指す姿を具体的に共有するための、地に足のついた取り組みだと思いました。

小さな振り返りの機会を数多くつくる

内山　学校教育目標の達成のためには、各教育活動の成果や課題を、学期や年度で検証していくことが重要になります。さらには、各教科・科目、各分野・単元、そして日々の各授業の検証も必要でしょう。つまり、大、中、小いろいろな規模のPDCAサイクルが存在し、それぞれが個別に回るのではなく、かみ合い、連動して回ることで、学校教育目標の達成に向けた大きなPDCAサイクルが回るイメージです（**P.4図2**）。

荒瀬　PDCAサイクルを回す上で大切なことは、様々な場面でチェックの機会を設け、振り返ることです。PLANやDOの段階でも、「本当にこの計画がベストなのだろうか」「この取り組み方でよいのだろうか」とチェックすることが重要です。そして、気づいたことを、その都度言語化することが大切です。

内山　学期末や年度末だけでなく、もっと短期間でのチェックや振り返りが必要ということでしょうか。

荒瀬　途中で振り返ることで、現状を変えていくことができます。学期末・年度末の振り返りとは別に、小さな振り返りを意識的に行っていくことが大切だと思います。小さな振り返りであるわけですから、時間もあまりかけず、簡単なものでよいのです。その際に大切なのは、教科や学年、分掌を超えて、振り返りの内容を校内で共有することです。何を目的とした活動が、どのような成果を上げ、どのような課題が新たに見えてきたのかを、育成を目指す資質・能力を踏まえて語ることで、振り返りの言葉はすべての教師が理解できる共通言語になります。

内山　資質・能力を念頭に語り合うから、より分かり合えるのですね。

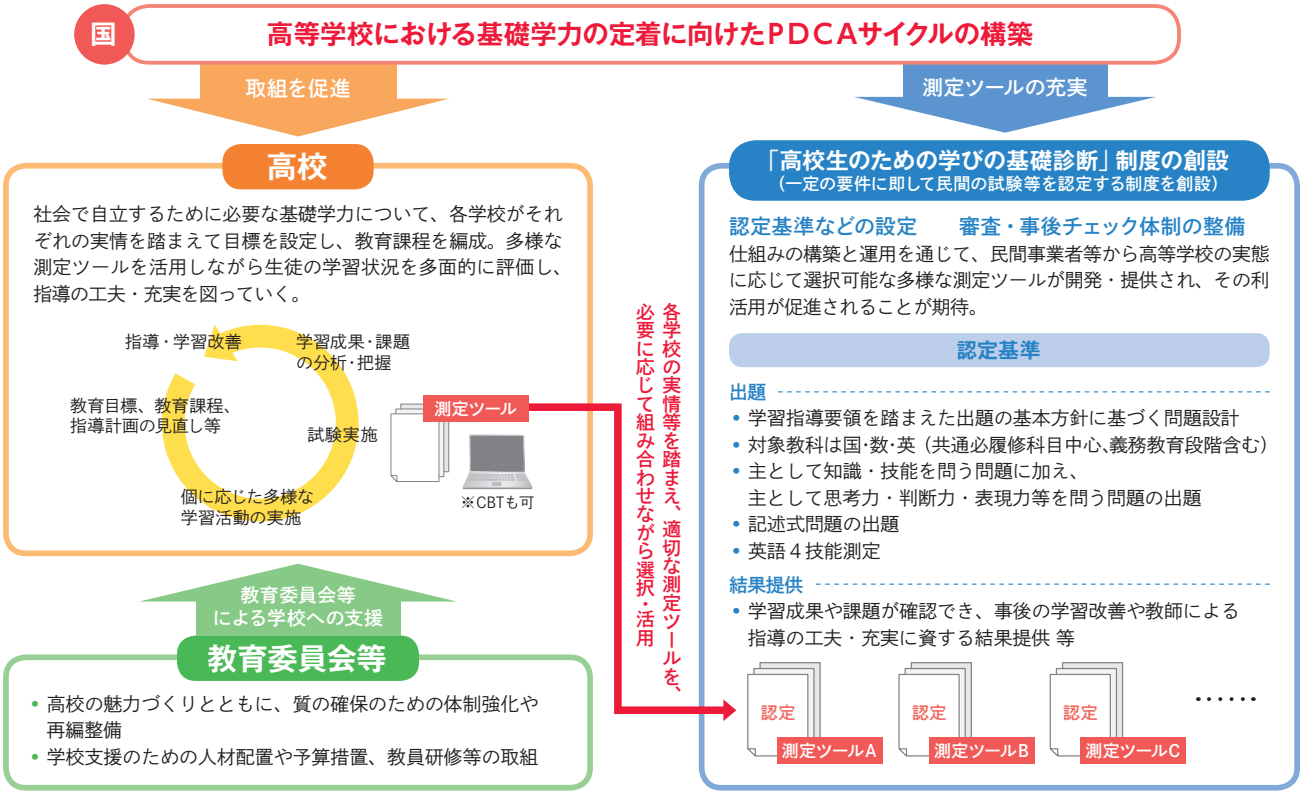
荒瀬　例えばある教科において、「難しい問題にも粘り強く向き合えるようになった」「予習にも取り組んでいる」「学んだことをクラスメートと語り合っている」といった生徒の現状が見えたとすると、深い理解へとつなげようとしている生徒の姿が浮かんできます。「では私の担当教科ではどうか」と振り返ることで、それぞれの担当教科の指導改善が進むはずです。それらがつながって、学校としてのPDCAサイクルを回すことができるでしょう。

生徒の背中を押すようなアセスメント活用を

内山　基礎学力の定着に向けた指導のPDCAサイクルを回す上で、利活用が求められているのが「高校生のための学びの基礎診断」です（**図3**）。測定ツールとなる民間の試験等には、各校が生徒への育成を目指す資質・能力を踏まえて、生徒の学習状況を多面的に評価することで、指導の工夫・充実を図ったり、学校教育目標や学習到達目標を設定したり、見直したりすることができる、現場の課題に寄り添ったアセスメントであることが求められています。

荒瀬　利活用の前提として、私たちは、評価が何のために行われるのかを改めて考える必要があります。指導と評価の一体化といったことも含めてですが、学校で行う評価はつま

図3 「高校生のための学びの基礎診断」制度のイメージ



＊文部科学省「『高校生のための学びの基礎診断』制度について」を基に編集部で作成。

るところ、生徒の現状を把握し、元気づけ、後押しすることにつながらなければなりません。その観点から、各校は、自校で育成を目指す資質・能力を測定するのにふさわしいツールを選択・活用することが大切です。そうした原点に立ち返って、「高校生のための学びの基礎診断」の利活用のあり方を検討していただきたいですし、さらに、生徒の日々の学びの様子など、「高校生のための学びの基礎診断」だけでは分からないこと、つまり、生徒と接する教師だからこそ分かる生徒の学びの現状を、たくさんの教師がそれぞれの視点で見取り、共有していただきたいと思います。私は、「この生徒は最近、授業で積極的にほかの生徒と語り合うようになった」といった教師ならではの気づきも、生徒を評価するエビデンスの1つだと思います。生徒からやる気を引き出すためには、生徒自身が気づいていない成長やよさを教師が気づかせることが重要であり、そうした教師のプロフェッショナルな感覚は、教育活動における有効な支援であり、それこそ評価です。

そのような教師の感覚に基づいてルーブリックを作成することや、現在検討中の「キャリア・パスポート」の活用で、生徒の「これから」に役立つ評価が可能になると思います。既にそうした実践例は、「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」（＊1）でも見られます。学校独自のアセスメントにおいても知識を土台にした資質・能力を測定し、その基準・規準を生徒にも明らかにすることで、生徒との信頼関係を築きながら、学びを支援することができるでしょう。

内山 私たちも、資質・能力を適切に測定できるアセスメントを追究し、先生方の指導改善に役立てるように努力を続けたいと思います。

荒瀬 漢文の教材でも使う韓愈（かんゆ）の『雑説』に、「千里の馬は常に有れども伯楽は常には有らず」という一文があります。「千里の馬」を生徒の資質・能力、「伯楽」をそれに気づいて引き出し伸ばす教師と読み替えると、「常には有らず」すなわち、気づける教師がいつもいるとは限らない、では悲しいですね。「高校生のための学びの基礎診断」などを利活用することで、私たちが、生徒の力をしっかりと見取れるよりよい目利きになれることを願っています。

＊1 「高校生のための学びの基礎診断」の実施に向け、基礎学力の定着に向けた指導体制や教材開発とともに、生徒の基礎学力の定着度などを把握し、授業・指導改善に生かすためのテスト手法などについての研究開発を行う事業。18 年度は 17 事業が採択された。